

問題 アメリカ合衆国の2000年の大統領選挙において、フロリダ州で、アル・ゴアとジョージ・W・ブッシュの均衡を緑の党のラルフ・ネーダーが崩し、それによって勝敗が決まった。このような票割れは、民主的プロセスへの信頼を失わせるものとして、相対多数投票（「ひとり一票」で最も多くの票を得た者が当選する）以外の投票方法が採用されるべきであるという運動がある。以下の文章にでてくる「彼」ことロブ・リッチーと彼の組織「フェアヴォート——投票と民主主義のセンター」や数学者ウォーレン・スミスもそのような活動をしている。新たなオプションとして主張されているのは、是認投票（相対多数投票に似ているが、相違点として、二人以上に投票することもできる。通例どおり、最多の票を獲得した候補者が勝利する）、範囲投票（投票者は候補者を、0から10までの範囲（もしくはそこで指定されている数値的範囲）で採点する。最も高い平均点を獲得した候補者が勝者となる）、ランキング投票（各投票者が候補者を選好順に順位をつけるもの）などである。この知識を前提として、以下の文章を読んで問いに答えなさい。

だが彼は、是認投票には「見こみがない」とわかったと言う。「これについてわたしが提起しようとしている論点は、……政治家であればただちにわかってくれるだろうことだ。つまり、現行のシステムで51パーセントの得票率を得る者が、是認投票では負けてしまうというのはおかしくないですか、ということだよ」

これはセンターのウェブサイトでも提起されている問題だ。是認投票だけでなく範囲投票にもあてはまる。どちらも「投票者の51パーセントから好まれた候補者を、敗北させてしまう可能性がある。このような結果が万が一生じれば、おそらくそのシステムは撤回されるだろう」

……51パーセントから好まれた候補者ケネディが敗北するには、投票者の51パーセント以上から好まれるもうひとりの候補者、ニクソンが必要となる。ということは、少なくとも2パーセントの投票者は、ケネディとニクソンの両方を是認しているわけだ。まるで、ケネディとニクソンの両方のステッカーを車のバンパーに貼っているようなものである。ありうることではあるけれど、政治的にあまり筋がとおっているとは思えない。

半分ばかり信憑性のある状況としては、ケネディ支持者のうちの少数が、ニクソンも同じくらいよいと考え、何の戦略もなく両者を是認した——ただし、ニクソン支持者は誰もそうしなかった——場合が考えられる。ウォーレン・スミスも次のような例を挙げている。投票者の51パーセントがヒトラー候補者を支持し、49パーセントがガンジー候補者を支持しているとする。二人の候補者の主張はほぼ同一だが、一点だけ例外がある。ヒトラーは当選したら、自分に投票しなかった者を全員殺すと宣言しているのだ（ガンジーは誰も殺さない）。

……ランキング投票システムにおいて、ヒトラーが勝利することに注意されたい。彼は51パーセントの票を獲得する。しかし、社会全体にとっては明らかにガンジーの

ほうがよい。ガンジーが勝たなければ、投票者の半数近くが死んでしまうのだ。スミスはこれを、ランキング投票システムの根本的欠陥と考える。ランキング・システムは、AをBよりも好む者が何人いるかだけを見るのであって、AがBよりもどれだけ強く好まれているかには注目しない。是認投票や範囲投票なら、ガンジーが勝つことは少なくとも可能だ。いくらかの人々が戦略を無視し、完全に正直な投票を行えばよいのである。

論理的に言っても倫理的に言っても、この「欠陥」は欠陥どころではない。しかしながらリッチーは、ある重要な指摘をしている。彼はこのパラドクスに対する、政治家の反応について語っているのだ。今日現役の政治家や戦略家は、みな「最小限の提携」〔minimal coalition〕の概念を教えられている。これはウィリアム・ライカーの『政治提携の理論』〔The Theory of Political Coalitions〕(1962)のなかで作られた言葉だ。政治家はできるだけ多くの投票者にアピールしなければならないという、当時一般的だった考え方にライカーは挑戦した。勝つためにそのようなことをする必要はないし、実際そのようなことはしないとライカーは言う。ひとつには、票は高価である。勝ちそうだとすでにわかっているレースで、追加の票を何百万も得ることに意味はない。コストもイデオロギーになりうるのである。選挙運動への大口貢献者は、いずれ請求される借用書のようなものだ。「借り」のある人間は少ないほどいい。かくして候補者は、できるだけちょうどよい僅差で勝とうとする。相対多数投票の場合、最小限の提携はとりわけ単純である。50パーセントの支持を1票超えさえすれば、必ず勝利が保証される。まあ実際には誤差として、あと1、2パーセント超えるだろうけれど。今日の政治戦略の大部分は、票を入れることに応じてくれる51パーセントを確定すべく、有権者を切り刻むことに費やされている。

このルールを変えるようなシステム——より広範な公共善に目を向けるよう政治家たちに強いるもの——を、現状にぴったりと適応したスキルを持つ人々へ売りこむのは、かなり骨の折れることであるだろう。

——ウィリアム・パウンドストーン〔篠儀直子訳〕『選挙のパラドクス なぜあの人が選ばれるのか?』（青土社）より

William Poundstone, 'GAMING THE VOTE', 2008, Hill and Wang. Copyright (c) 2008 by William Poundstone.

問 800字以上 1600字以内で、まず、①筆者がいう「是認投票」「範囲投票」「ランキング投票」の問題点を要約し、次に、②「ルールを変えるようなシステム」を「現状にぴったりと適応したスキルを持つ人々へ売りこむ」にはどうしたらよいか、あなたなりの考えを論じなさい。句読点および段落を改めるために生じる余白も字数に数えるものとする。